

日本語複合動詞研究の現在

林 翠 芳

1

ここに言う複合動詞とは二つの動詞が結合して一つの動詞としての意味・用法を持つに至ったもの、いわゆる「動詞+動詞」タイプの複合動詞である。この二つの動詞が結合して一つの複合動詞を形成する場合、それぞれの動詞と動詞が果たす役割には違いがあり、また、その構成要素間の関係も非常に複雑である。複合動詞を含む複合語一般における構成要素間の関係について山田孝雄(1936)では主従関係、一致関係、並立関係の三つが立てられ、松下大三郎(1928)では対等関係、修飾関係、実質関係、補足関係、客体関係の五つが立られている。また、斎賀秀夫(1957)では並立関係、主従関係、補足関係、修飾関係、補助関係、客体関係の六類が示され、玉村文郎(1985)では統語構造(従属構造)と並列構造(等位構造)の二類が立てられている。複合動詞の特徴は勿論複合語一般の性質の中に含まれるものである。しかし、^①『複合動詞資料集』によると、複合動詞は7,000語を上回る莫大な数に上っているから、やはり複合動詞独自の文法的特徴、語彙の特徴、意味の特徴などを探究する必要があると考えられる。多くの研究者が様々な角度から複合動詞の真相に迫ろうとしている現在、現代日本語における複合動詞の語構造やその要素である動詞の結合関係、また、動詞要素の意味特徴、そして複合動詞に関係のある様々な研究をふりかえって、複合動詞にかかわる新しい研究方向を探る資料としたい。

2

はじめに複合動詞の語構造について触れる。複合動詞の全体像を考えるに当たって、まず考えなければならない問題は語構造である。複合動詞の語構造を分析する際に、その複合動詞自身の表す全体的な意味を前提とし、その上その構成要素の特徴や構成要素間の結合関係を明らかにすることが大切であり、その分析もまた様々な角度、様々な観点からなされる可能性を有している。

寺村秀夫(1969, 1984)では前項、後項の独立性という観点から複合動詞が下記のように四類に分類されている。

- (a) 自立 V+自立 V: 呼び入レル, 握リツブス, 殴リ殺ス, ネジ伏セル
- (b) 自立 V+付属 V: 降り始メル, 呼ビカケル, 思イ切ル, 泣キ出ス
- (c) 付属 V+自立 V: サシ出ス, 振り向ク, 打チ樹テル, 引キ返ス

- (d) 一体化したもの: 払い下ゲル, (話ヲ) 切り上ゲル, トリナス, (仲ヲ) 取りモツ,
(芸ヲ) 仕込ム

上の分類における V は動詞要素を指す。この分類法は、かなり広い視野に立って行なわれたものであるが、「自立 V」と「付属 V」を判断する基準が明示されていないらみがある。特に(a)と(b)については、二つのタイプの間に明確な線を引くことは簡単ないように見えてむずかしいと寺村氏自身も述べている。

山本清隆(1984)では格支配の観点から複合動詞を分類している。山本氏は Valence 理論を応用して、文レベルで「動詞+動詞」型の第一次結合の複合動詞をその結合価や格成分が前項動詞及び後項動詞の本来的な結合価や格成分とどう結びつき得るかを分析し、複合動詞における格支配のあり方を調べ、格支配のあり方による複合動詞の分類を行っている。例えば結合価 1 の複合動詞の例:「子供が泣き叫ぶ」は「子供が泣く」「子供が叫ぶ」と分解することができ、この場合は前項動詞「泣く」と後項動詞「叫ぶ」は、ともになお格支配能力を保持しながら複合動詞「泣き叫ぶ」を構成しているということである。山本氏は複合動詞について以下のように四類に分類している。

- I 類: 格成分は前項動詞と後項動詞のそれぞれと対応関係にある。
- II 類: 格成分は前項動詞とは対応するが、後項動詞とは対応しない。
- III 類: 格成分は後項動詞とは対応するが、前項動詞とは対応しない。
- IV 類: 格成分は前項動詞と後項動詞のいずれとも対応関係を示さない。

山本(1984)が言っているように実質的な分類そのものは寺村分類とあまり変わらないが、その判断がテストニングによっている点が異なる。また、寺村氏のいう「付属」語化、或いは従来からよく言われてきた動詞の接頭・接尾辞化という現象は、実は格支配能力の欠落であると指摘されている。

斎藤倫明(1984)では複合動詞構成要素の意味と単独用法との比較という立場から、複合動詞の構成要素の中で(接辞ではなく)語基でありながら、構成要素が個別に単独用法においては有しなかった意味を有するようになってきているものについて考察している。斎藤氏の採用している方法は「自立 V」と「付属 V」を区別するの一つの手がかりとなるに違いない。

山本氏と斎藤氏は、違う角度、違うレベルにおいて、寺村氏の四分類を一層厳密にしたと言え、特に「自立 V」と「付属 V」を見分けるのに、具体的、客観的な基準を示したと言える。

また森山卓郎(1989)では寺村氏の四分類を踏まえながら、統語論的複合動詞、半統語論的複合動詞と語彙論的複合動詞という観点から複合動詞の語構造が研究されている。

一方、長嶋善郎氏は両項における修飾関係から複合動詞を二類に分類した。

- I 類: 「N が (を・に) V₂」と言えるもの。例えば: 「(木を) 切り倒す」「(町内を) 見廻る」「(木に) よじのぼる」等。

Ⅱ類:「Nが(を・に) V₁」とは言えるが、「Nが(を・に) V₂」とは言えないもの。

例えば:「(本を) 読み通す」「(インクが紙に) しみこむ」等。

このⅠ類とⅡ類の V₁ と V₂ の関係を長嶋氏は

Ⅰ類: v₁+V₂ (修飾要素+被修飾要素)

Ⅱ類: V₁+v₂ (被修飾要素+修飾要素)

とまとめている。また、氏は意味の上で中心を成すのは、Ⅰ類では V₂ であり、Ⅱ類では V₁ であると指摘している。しかし、氏自身が言うように、この二類に分類しにくい複合動詞も数多くあり、この二類からはみ出したものをいかに扱うかが問題となる。

姫野昌子(1988)では複合動詞「V₁+V₂」の両項の意味関係から、以下のように七類に分類している。

(1) V₁ が接頭語化したもの: 差し付ける=付ける

(2) V₁ して V₂ する: 巻き付ける=巻いて付ける

(3) V₁ するために V₂ する: 飾り付ける=飾るために付ける

(4) V₁ すること

が V₂ する (V₂' する): V₂' は V₂ が他動詞の場合に対応する自動詞を表す。V₂ が「始める」なら V₂' は「始まる」となり、「降り始める」は「降ることが始まる」と言い換えられる。
読み過ぎる=読むことが過ぎる

を V₂ する: 読み続ける=読むことを続ける

に V₂ する: 読み慣れる=読むことに慣れる

(5) V₂ して V₁ する: 読み通す=通して読む

(6) V₂ が他の言葉でしか表せないもの: ならみつける=強くならむ, 読み付ける=いつも読んで慣れている (V₂ が単独の動詞として用いられないもの, 例えば「行きそびれる」の類もここに含まれる)

(7) V₁ と V₂ が一体化しており、意味が分析できないもの: 落ち着く

これらのうち(4)(5)(6)に属する後項動詞は一応補助動詞的要素をもつものと見なされている。

ただ、ここで問題となるのは、両項の意味関係による分類というのはなかなか姫野氏の七分類では整理し切れないことである。例えば「集まり散る」「出はいる」「送り迎える」のような、いわゆる「自立 V+自立 V」の語でも「…たり…たりする」と言い換えられるし、また「付属 V+自立 V」の場合でも姫野氏の言う「差し付ける=付ける」と単純に考えられないものがある。前項動詞「付属 V」は後項動詞を強めたり、または副詞的に言い換えられたりするものがある。例えば「打ち見る=ちょっと見る」「押し黙る=全然口をきかない」のようなものがあり、人によっては分類の項目も増えたり

する。また、各人によってどの語をどのグループに分類するかも違って来る可能性がある。従って分類に際しては客観的基準を設けなければならない。この客観的基準の必要という点は寺村氏の分類においても同様に言えることであり、寺村氏の言う「自立 V」と「付属 V」はいかなる客観的基準で判断するかが問題となっている。場合によっては、どちらが主で、どちらが補助的であるのかを判断すること自体が難しいのである。

石井正彦（1983, 1992）では複合動詞の前項部分にしか位置しないもの、逆に後項部分にしか位置しないもの、また、前項にも後項にも位置し得るものに注目して、複合動詞の動作、変化の面と結果性の面から複合動詞の語構造を解明しようとしている。すなわち複合動詞の前項要素は主体が対象に働きかけるその動作を表すことによって、複合動詞のうごきの経過の側面を表し、後項要素は前項要素が表す主体の動作によって実現される場所の対象の変化を複合動詞の動きの結果の側面として表すという語構造である。

本章の冒頭でも触れたように複合動詞の語構造や両項の意味関係についてはまさに多様な角度、多様な観点からなされているのである。また語レベルの研究もあれば、文レベルの研究もある。しかし、各人の研究がそれぞれの特徴を有しながらも、複合動詞の姿がいま一つ語り尽くされていないような気がする。おそらく、「付属 V」のあり方が複合動詞の全体像を考えていく上で、重要なポイントとなると考えられる。次章では「付属 V」を中心にその研究現状を見たいと思う。

3

複合動詞の意味を考える時には勿論その語構造と切り離すことができないが、その語構造を明確にするためにも構成要素となる両項の動詞の意味をはっきりさせる必要がある。特に複合動詞の構成要素として働く場合、独自の意味、用法をもっているものが重要な考察対象となる。

本章では前項動詞についての研究について述べる。複合動詞の構成要素のうち後項動詞についてはすでに様々な論究が存在するが、前項動詞についてはあまり取り上げられていないようである。

斎藤倫明（1986, 1988）では複合動詞前項の音便化の研究や複合動詞「引く＋～」の意味の多様性の研究が見られる。「引く」について斎藤氏は、「意味の強調化」は「音便化」に伴う特徴であることや「意味の強調化」は音便形複合動詞が単独で存在している場合（例、引っつかむ）には後項の意味に対して起こり、音便形、非音便形が共存している場合には、非音便形全体の有する意味に対して起こりやすいということを指摘している。

先に第2章で言及した石井（1983, 1992）の研究は前項になる動詞の性質の指摘に注目すべきものがある。

前項動詞と違って後項動詞の意味は一層複雑であり、そのため、それについての研究も多く見られる。たとえば、個別的な考察としては姫野昌子の一連の論文（1975, 1976, 1974, 1978, 1979, 1980, 1982）における綿密な研究を挙げなければならない。ここでは、後項動詞についての分類を中心に先行研究を見ていきたい。

姫野昌子（1988）では後項動詞のうちよく使われるもの（約70語）について分類を行っている。

1. 方向性に関するもの

盛り上がる 見上げる 振り落とす 飛び付く 切り付ける 飛び込む 乗り出す 押し込める 申し出る 押し入る 乗り入れる 出回る 鳴り渡る 行き合わせる 言い渡す 飛びかかる 呼びかける 振り返る 言い返す 投げ合う 見回す

2. 程度の強調に関するもの

震え上がる 締め上げる 叱り付ける 恥じ入る 静まり返る 書きまくる 弱り果てる 勇み立つ 騒ぎ立てる 疲れ切る 困り抜く 焼き尽くす 老い込む

3. ことの成否・過不足に関するもの

見誤る し損じる し損なう 見間違える 見違える 見落とす 見忘れる 見残す 書きあぐむ 書きあぐねる 見そびれる 言い洩る 見かねる 寝過ぎる 寝過ぎず 寝足りる 見得る

4. アスペクトに関するもの

見始める 降り出す 明け初める 死にかかる 死にかける 見続ける 見終わる やり終える し上げる し上がる やり抜く やり通す 登り切る やり付ける 見直す 見慣れる

武部良明（1953）では『大言海』『大日本国語辞典』『日本大辞典言泉』の見出し語のうち補助動詞要素をもつもの、すなわち、後項動詞の中で原義が稀薄になって補助動詞化するものが175語（210種）あると指摘し、そして、それについて以下のように機能的に分類している。（紙幅の関係で例語は各1例に限った）

一. 強意的意味を添えるもの……縮み上がる

二. 動作の方向を示すもの

- | | |
|--------------|--------------|
| 1. 相互……示し合せる | 2. 交錯……走り重なる |
| 3. 充滿……燃え広がる | 4. 一致……出そろふ |
| 5. 彷徨……乗り歩く | 6. 対向……吠えかかる |
| 7. 接着……思ひあたる | 8. 到達……思ひ至る |
| 9. 附加……書き加へる | 10. 侵入……飛び入る |

- | | |
|---------------|---------------|
| 11. 貫通……見通す | 12. 下向……飛びおる |
| 13. 上向……立ちあがる | 14. 退去……逃げ落ちる |
| 15. 分離……書き棄てる | |

三. 動作の起り方を示すもの

- | | |
|--------------|---------------|
| 1. 開始……思ひ起す | 2. 継続……攻め重ねる |
| 3. 変化……燃え盛る | 4. 習慣……乗り覚える |
| 5. 完遂……刈りあげる | 6. 中止……売り余す |
| 7. 失敗……寝そびれる | 8. 再行……巻き返す |
| 9. 難易……為得る | 10. 過不足……寝すごす |

また、新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子（1987）では後項動詞について以下のように分類している。

1. 時間相を中心に

話しはじめる 散り出す 沈みかける 突きかかる 読みおわる 撮りおえる

2. 空間相を中心に

探し出す 浮かれ出る 迎え入れる 見入る 乗り込む 運びあげる 燃え上がる 積み立てる 沸き立つ 結びつける 登りつく

※その他の空間相を表す複合動詞

掘りかえす 通りすぎる 吹きぬける 呼び止める 立ち止まる

3. 様相・程度を表すものを中心に

待ちあわせる 喜びあう 買いとる 引き受ける

4. 完遂を表す

憎みとおす 勝ちぬく 磨きあげる 縮みあがる 擦りきれる 渡りきる 語り尽す

5. 再行・習慣を表す

巻きなおす 張りかえる 読みかえす 着つける 住みなれる

6. 失敗・難易を表す

出しわすれる 書きそこなう 食べすぎる 語りうる 待ちかねる

複合動詞の後項動詞の意味を考える場合、接尾辞や補助動詞の問題も絡んでくるが、「動詞の連用形に後接する補助動詞のうち、アスペクト形式とするものは接尾語と見られないことはない（流レ込ム、走りヌクなど）。しかし、これらは動詞に準じて活用をするという点で、やはり接尾辞とはせず、補助動詞とする」と寺村秀夫（1984）では指摘されている。

ここでは後項動詞と接尾辞や補助動詞の関係について詳しく紹介することを避けるが、全体的に言って後項動詞は前項動詞と違って、複合動詞を構成する場合その動詞が単純動詞の意味とは変わる場合が多い。『複合動詞資料集』の集計によると、前項にのみ位

置する要素は1,333件で、後項にのみ位置する要素はわずかに259件である。この数字から分かるように後項動詞は使われる頻度が高く、広汎な前項動詞と結合し得る語が多いということを物語っている。勿論、中には限られた語としか結合しないものもある。複合動詞の両項の意味を考えると、後項動詞の意味の方が一層複雑であると言える。中でも多義にわたっている場合にはなおさら複雑さが増す。後項動詞のこのような複雑さから、上記三者の後項動詞（特に補助動詞）についての分類が十分妥当なものかどうかについても、検討の必要があると思われる。この後項動詞の意味を正確に分析することは、複合動詞全体の意味や語の構造や両項の意味関係などをはっきりさせることにも繋がるはずである。

5

複合動詞の語構造や構成要素については2、3、4の各章で見てきた通りであるが、さらに、複合名詞との関係やサ変動詞との関係、或いは漢語動詞との関係、また複合動詞の前項動詞における音便現象などといった研究も行われる必要がある。

例えば和語の複合動詞と対応する漢語（サ変動詞）

取り捨てる——取捨（する） 引き退ける——引退（する）

解き放す——解放（する） 伝え受ける——伝受（する）

などが見られる。石井正彦（1987）では漢語サ変動詞と複合動詞との意味・用法の関係として次の五つのタイプを指摘している。

- ① 両者の意味・用法がほぼ重なると考えられるもの。
- ② 漢語サ変動詞の意味・用法の一部と複合動詞の意味・用法とが重なると考えられるもの。
- ③ 両者が共通の意味・用法をもちながらも、それぞれ独自の意味・用法をも有していると考えられるもの。
- ④ 複合動詞の意味・用法の一部と漢語サ変動詞の意味・用法とが重なると考えられるもの。
- ⑤ 両者に同一の意味・用法がないと考えられるもの。

石井氏は、さらに①～⑤では①が最も多く、次いで⑤、④が多い。②、③は少なく、②よりも④の方が多いと述べ、このことは、一般的に漢語サ変動詞の方が複合動詞よりも意味の範囲が狭く、それだけに厳密な表現になり得ることを示していると指摘している。

一方「立ち食い」のような複合名詞があるのに、「立ち食う」という複合動詞がないのはなぜなのか。この「立ち食い」については、前項が後項の《動作》によって実現される結果としての変化を表してはいない。主体は「立っ」ている状態において客体を「食う」のであり、客体を「食う」ことによって主体あるいは客体がすわった状態から

「立っ」た状態へと《変化》するのではないからである、と石井氏は分析している。

このように「複合動詞」—「複合名詞」の対応形がないものもあれば、「生き残り」—「生き残り」, 「売れ残り」—「売れ残り」のような対応形のあるものも存在する。

動詞連用形の名詞化の難易に関して、玉村文郎（1970）では次のようなことが指摘されている。

- ① 単音節動詞（単音節連用形）は名詞化しにくい。
- ② 単独の形でよりも、複合形式の方が名詞化されやすい。
- ③ 動詞に対応する名詞として、漢語が頻用される場合は名詞化しにくい。

石井（1987）では《動きを継的に表す》という側面から、「隠し縫い」「崩し書き」「添え書き」「すかし織り」「ぼかし織り」「寄せ植え」などの複合名詞は変化の内容を表す要素が前項に、それをひきおこす動作の形態を表す要素が後項に配列される例があり、このことは一つの動きを、動作形態の面と変化内容の面とに分解しても、その動きをまるごと動詞として表現するか、動きの面（この場合など動作形態面）に焦点を当て、それを時間的な前後関係から離れて名詞として表現するかで異なる場合のあることを指摘している。これはちょうど石井氏が分析した動作形態の面を前項に、変換形態の面を後項にという複合動詞の語構造と逆さになっている。

6

私自身も先に修士論文で日本語複合動詞の語構造とその構成要素の造語力について考察したが、しかし、まだまだ説明しえていない問題があって、日本語複合動詞の語構造の多様性を感じている。上述のごとく、すでに多くの研究があるにもかかわらず、まだ定説となるものは登場していない。中では寺村氏の四分類が一般に広く受け入れられているようであるが、複合動詞の深層に迫ろうとすれば、なお分析・検討を要する問題は少なくない。多くの日本語学習者にとっては、個々の複合動詞の意味を正しく把握すること自体が容易でない。これには、当然のことながら複合動詞の語構造の問題や構成要素の意味特徴や用法の問題が絡んでくるわけだが、同時に造語力の問題も関わってくる。『複合動詞資料集』の統計を見ると、辞書に登録されていない複合動詞の数が登録されている複合動詞の数をはるかに上回り、全体の62.8%を占めている、辞書に登録されていないようなこの複合動詞がどういう性質をもっているのかが解明されなければならない。辞書に載るか載らないかについて、石井（1988）では次のようなことが指摘されている。

- ① 辞書に載る（載りやすい）複合動詞と載らない（載りにくい）複合動詞との間には性格の違いが見られる。
- ② その違いは意味が特殊なものが辞書に載るという複合語の辞書登録の一般的な傾向におおよそ合致するものである。

③ 実質的な意味をもつ要素どうしの結びつきである複合動詞^③については、主体の動作が客体の変化を（必然的に）ひきおこす関係にあるA1類が辞書に載る複合動詞が多く、前項要素と後項要素がともに主体の動作または変化を表し、A1類のような関係を構成しないA3およびA4類が辞書に載らない複合動詞が多い。

また、森田良行（1978）も国語辞典でその語本来の意味をそのまま残している複合動詞は載せない場合が多く、また、動詞の造語成分はその項目において解説し、その付いた形を一一見出し語に立てない場合が多いということを指摘している。

辞書に載らない複合動詞の意味が簡単に把握されるのであれば、辞書に頼らなくても意味が理解できるから問題が生じない。しかし、他方の造語力の面から考えるときは、辞書に載らない複合動詞は新語、或いはまだ市民権を得ていない新語であるという可能性も考えられる。このような複合動詞がどのような結合をしているのか、また、どのような構成要素が新語を造りやすいのかということも今後考えなければならない。

また、他の言語の複合動詞との対照研究も一つの課題ではないかと思う。すでに日本語と英語の複合動詞における対照研究が見られるが、中国語と日本語の対照研究、例えば中国語の趨向動詞と日本語の移動・方向を表す複合動詞との関係とか、中国語の二字漢語と日本語の複合動詞あるいは漢語との関係などはこれからの研究課題となるであろう。

以上、現代語を中心に日本語複合動詞研究の現状について不十分ながら管見に入った資料をもとに概観を行った。

注

- ① 野村雅昭・石井正彦・林 翠芳『複合動詞資料集』（特定研究「言語データの収集と処理の研究」1987）。
- ② 林 翠芳「日本語複合動詞の語構造とその造語力に関する一考察」（1988年 北京外国語学院修士論文）。
- ③ 石井氏は構成要素間の関係をA、B、C、D、Eの四類に分け、そのうち、A類についての細分類をしている。A1類：前項が主体の他動的な実現形態を表し、後項がそれによってひきおこされる客体の変化の内容を表す。A2類：前項が主体の自動的な実現形態を表し後項がそれによって生ずる主体自らの変化の内容を表す。A3類：前項も後項もともに主体の動作または変化を表し、前項が後項を修飾する関係にある。A4類：前項も後項もともに主体の動作または変化を表し、両項が対等の関係にある。A5類：前項が主体の状態を表し後項がそのもとの主体の動作または変化を表す。

[引用文献及び主要参考文献]

1. 野村雅昭・石井正彦・林 翠芳『複合動詞資料集』（特定研究「言語データの収集と処理の研究」1987）。
2. 新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子『複合動詞』——外国人のための日本語例文・問題シ

- リーズ4——(荒竹出版, 1987)。
3. 関 一雄『国語複合動詞の研究』(笠間書院, 1977)。
 4. 佐藤喜代治編『国語学研究事典』(明治書院, 1983)。
 5. 玉村文郎『語彙の研究と教育(下)』(国立国語研究所, 1985)。
 6. 玉村文郎「現代語における居体言」(『花園大学研究紀要』創刊号, 1970)。
 7. 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』(くろしお出版, 1984)。
 8. 寺村秀夫「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト(1)」(『日本語・日本文化』1, 1969)。
 9. 石井正彦「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」(『日本語学』8, 1983)。
 10. 石井正彦「現代語複合動詞の語構造分析—《動作》・《変化》の観点から」(『国語学研究』23, 1983)。
 11. 石井正彦「漢語サ変動詞と複合動詞」(『日本語学』2, 1987)。
 12. 石井正彦「複合動詞」(『ケーススタディ日本文法』桜楓社, 1987)。
 13. 石井正彦「辞書に載る複合動詞・載らない複合動詞」(『日本語学』5, 1988)。
 14. 石井正彦「動詞の結果性と複合動詞」(『国語研究』31, 1992)。
 15. 武部良明「複合動詞における補助動詞的要素について」(『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂, 1953)。
 16. 長嶋善郎「複合動詞の構造」(日本語講座4『日本語の語彙と表現』大修館書店, 1970)。
 17. 森田良行「日本語研究の問題点—日本語複合動詞について—」(早大語学教育研究所『講座日本語教育』14, 1978)。
 18. 斎藤倫明「複合動詞構成要素の意味—単独用法との比較を通して—」(『国語語彙史の研究』五, 和泉書院, 1984)。
 19. 斎藤倫明「複合動詞前項の音便化—意味との関わりについて—」(『国語論究1 語彙の研究』明治書院, 1986)。
 20. 斎藤倫明「複合動詞「引く+〜」の意味の多様性」(『国語学』152, 1988)。
 21. 姫野昌子「動詞の連用形に付く補助動詞及び複合動詞後項」(『日本語教育事典』大修館書店, 1988, 縮刷版2版)等。
 22. 山本清隆「複合動詞の格支配」(『都大論究』21, 1984)。
 23. 森山卓郎『日本語動詞述語文の研究』(明治書院, 1989)。

山田孝雄『日本文法学概論』(宝文館, 1936)

松下大三郎『改撰標準日本文法』(中文館, 1928)

斎賀秀夫「語構成の特質」(『現代国語学Ⅱ—ことばの体系—』1957, 筑摩書房)